

地域・大学協働による学生の「能登・祭りの環」インターンシップ事業の試み
団体名：能登キャンパス構想推進協会「能登・祭りの環」インターンシップ事業実行委員会
代表者名：池田幸應

1 はじめに（背景・目的・目標）

全国的に地方での過疎高齢化が加速しており、石川県、特に奥能登地域においても、その傾向は顕著となり、地域コミュニティの存続可否が深刻な課題となっている。奥能登地域には、約 200 の「祭り」があり、地域資源として豊富な自然、歴史、文化、そこに暮らす人々の存在が挙げられ、コミュニティ存続自体を含め地方創生の視点からも、その地域の祭りなど伝統的行事等の継承及びそのための次世代人材の確保とその育成が重要である。

また、本県は、金沢市を中心に 21 高等教育機関が集積し、約 3 万人を超える学生が集う「学都」県ではあり、2011 年 3 月より石川県、奥能登 2 市 2 町（珠洲市、輪島市、能登町、穴水町）、県内 4 大学（金沢大学、石川県立大学、石川県立看護大学、金沢星稜大学）が加盟し、「能登キャンパス構想推進協議会」が設立・組織され、「能登・祭りの環」インターンシップ事業が推進されている。

本稿では、地域・大学協働による取組みである「能登・祭りの環」インターンシップ事業、特にその中で穴水町での長期インターンシップでの取組みについて記述する。

2 活動内容

「能登・祭りの環」インターンシップ事業は、2011 年度当初、「能登の祭り支援プロジェクト」としてスタートし、翌年度より、本学が主幹大学として「能登・祭りの環プロジェクト」、そして 2016 年度より「能登・祭りの環」インターンシップ事業として展開されている。祭りについて、各市町に 1 つの祭りが選定され、学生・教員の所属大学の壁を取り除き、祭り主催地域、その関連自治体行政部局との連携・協働促進をめざした「祭りの環」により、学生たちの視点で奥能登地域の魅力を発信し、可能な範囲で地域課題への解決策に取り組まれている。

2018 年度における対象の祭りは以下の 5 つである。

- ・穴水町「沖波大漁祭り」(8 月 14 日～15 日)
- ・能登町「矢波諏訪祭」(8 月 15 日～16 日)
- ・輪島市「黒島天領祭」(8 月 17 日～18 日)
- ・珠洲市「粟津の秋祭り」(9 月 12 日～13 日)

また、長期インターンシップの対象は、2017 年度は穴水町「沖波大漁祭り」、2018 年度は珠洲市「馬縹の秋祭り」である。



写真 1 2018 年度「能登・祭りの環」インターンシップ対象祭り

そのうち、本学が中心的に参画している穴水町「沖波大漁祭り」における活動について以下に示す。

●「沖波大漁祭り」について

沖波地区において、海の安全と大漁を祈る祭りであり、神輿と 5 基の各組のキリコが笛と太鼓にはやされて町中を夜中まで練り歩き、翌日は海中にキリコを担ぎ込み、勇壮に乱舞する昼夜通して見所のある祭りである。「沖波大漁祭り」における学生たちの主な活動をいかに記述する。

(1) 責任者会議

同地区の区長、祭り総代をはじめ 5 地区の青年団代表が会し、祭りの段取りやコース等について、また継続的に参加している学生への対応についても検討・確認された。

(2) キリコ出し

同地区では、5 基のキリコを全て地区内倉庫 1 ヲ所に解体して保管してある。当日、青年団と長期イ

ンターシップ学生（昨年度受講生）及び本学人間科学部池田ゼミナール学生が協働でキリコ保管倉庫から5つの各地区へキリコ部材を搬出した。



写真2 地域住民と学生たちによるキリコ出しの様子

(3) キリコ組み立て（「立戸組」での事例）

立戸地区でのキリコ組み立てを同地区の世話役、青年団、及び長期インターンシップ学生（昨年度受講生）及び池田ゼミナール学生が協働で行った。キリコの組み立て方法には、伝統的手法があり、古くからの地域での祭りについての言い伝えや手法について、古参の高齢者の方々から説明を受けながら取り組んだ。また、祭りの横笛の御囃子についても、特に女子学生が伝授された。学生たちにとっては、単なる組み立て作業ではなく、地域の文化や風習を学び、人々とのコミュニケーションの重要な場となっている。



写真3 キリコ組み立て及び御囃子の伝授を受ける女子学生

(4) 祭り本番

2018年度「能登・祭りの環」インターンシップ事業としての「沖波大漁祭り」には、学生50名（金沢大学16名、石川県立看護大学9名、金沢星稷大学21名、金沢工業大学1名、北陸学院大学2名、放送大学1名）及び教員2名（金沢星稷大学 池田幸應、小西賢吾）が参加した。

祭りの概要及び具体的スケジュールは以下のとおりである。

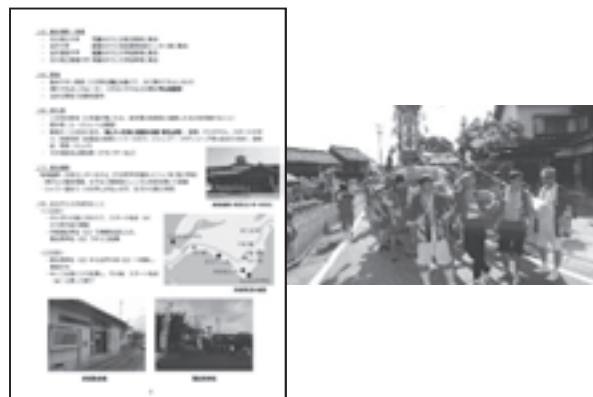


図1(左)「沖波大漁祭り」の概要及び具体的スケジュール
写真4(右)「立戸組」のキリコを巡行での休憩時での様子

「能登・祭りの環」インターンシップ事業として、祭り当日への学生参加に留まらず、事前の地域での祭りの打合せや準備段階から祭りへ参画するに至っている。

3 成果、結果の考察

参加学生にとって、能登の伝統文化である祭りを直接的に学ぶことができ、課題を自ら見つけ出し、取り組むことができる実践的な学びの場であり、また他大学や地域の方々との交流の機会を得ることができる。また、地域にとっても、担ぎ手として学生が参加すること祭りに活気が出る。また、当該地域に愛着を持ってもらうことで卒業後も引き続き地域で活躍してもらうきっかけとなる。特に長期インターンシップについては、学生が祭り開催の準備段階から地域に入り、運営会議等に参加するほか、地域住民への聞き取り調査等を通じ、学生を含めた地域外の人が継続的に能登の祭りを支える仕組みづくりへ繋がっているものと考えられる。

4 今後の課題、展望

奥能登地域の過疎高齢化対策に、「能登・祭りの環」インターンシップ事業が一助となり、また参加学生たちにとっての学びとなっている。しかし、県内外の複数大学連携・協働による更なる地域課題解決型施策が望まれ、そのためにも、本事業の継続・発展が必要である。